

TSUJI HITONARI
DIARY
1994-1997
SHUEISHA

僕のヒコ一キ雲

日記 1994-1997

辻
仁
成

辻 仁成 Tsuji Hitonari

1959年東京生まれ。1989年『ピアノシモ』で第13回すばる文学賞受賞、1997年『海峡の光』で第116回芥川賞受賞。主な著書に『クラウディ』『カイのおもちゃ箱』『旅人の木』『グラスウールの城』『母なる風と父なる時化』『オープンハウス』『愛はプライドより強く』『パッサジオ』『アンチノイズ』『ニュートンの林檎』『愛の工面』『白仏』ほか、詩集、エッセイ集等がある。

ぼく ^{ぐも}
僕のヒコーキ雲 日記 1994—1997

1997年12月20日 第1刷発行

つじ ひとなり
著者＝辻 仁成

発行者＝小島民雄

発行所＝株式会社集英社

郵便番号101-50 東京都千代田区一ツ橋2-5-10

電話 03(3230)6100＝編集部 (3230)6393＝販売部
(3230)6080＝制作部

印刷所＝大日本印刷株式会社

製本所＝文勇堂製本工業株式会社

検印廃止 ISBN4-08-774264-4 C0095

定価はカバーに表示してあります。

©1997 Hitonari Tsuji, Printed in Japan

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛てにお送りください。送料は小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律上認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

¥1500

僕のヒコキ雲 目次

装画 マーク・ロスコ

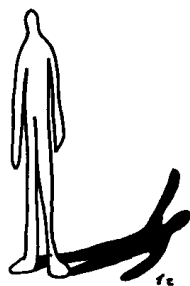
装丁 後藤繁雄＋林 修三

本文イラストレーション 辻 仁成

僕のヒコーキ雲

日記 1994—1997

1994



一九九四年・夏

某月某日。

日記をつけなくなった。なんでも突然前触れもなくやりたくなるのがきまぐれな僕の性格である。ところが撤退も早い。飽き性だけは生涯直らないに違いない。

思い起こせば、ジョギングだって、ラジオ体操だって全て三日と持たなかった。腹筋台を買った時も、三日目にお腹の筋肉が痛くなって挫折し、その日から腹筋台は物干し台に変わってしまったのだから。

日記なんか、自慢じゃないが毎年正月にその年の日記帳を必ず買っている。最初の二、三ページだけ一生懸命書かれた日記が、わが家の押入れには腐るほどある。もちろん、今年のもあってちゃんとある。ワープロのすぐ横に、1994と表紙に印刷された可愛い日記帳が立てかけられているのだ。今年は少し頑張って、一カ月は続いたが、二月に入ったある日、突然筆が止まってしまった。いったん筆が止まると何故か、二度と書きたくなくなるのが日記という病の恐ろしさなのである。まあいいか。

とにかく、これからが楽しみだ。一応目標は一年。三百六十五日間の自分と向き合いながら、

生きる瞬間を見つめていくことにする。僕は僕というもうひとりの人間の複雑怪奇な心境の中を旅するのだ。心の境が見えるだろうか？

某月某日。

朝まで小説を書いていた。

某月某日。

夕方まで歌っていた。

某月某日。

書くことのない一日が過ぎていった。そろそろ日記が重荷になりはじめた。やれやれ。

某月某日。

北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の核疑惑に絡んで、朝鮮高校の女学生の制服——チマ・チヨゴリ——が通勤電車の中で心ない人達によって切り裂かれるという事件が相次いだ。新聞でそれを知って、僕は朝から機嫌が悪い。非常に不愉快な気持ちになった。彼女たちがどう思うで、今毎日電車に乗って通学しているかと思うと、悲しくなる。切り裂かれた少女たちの痛みは、一生心に残るのだ。弱い者を標的にする卑劣な人間がこの日本にいるという事実がやり切れない。そしてこの事件を他人事のように見ている冷たい視線にも耐えられない。彼女たちを守らなければならない。みんな同じ街で生きている仲間なのだから。

フランスの作家、イブ・シモンは、南アフリカから移住してきた人々への差別が激化したとき、俺の仲間に手を出すな、という声明を出した。何万枚というステッカーを作って街中に貼ったのだ。結果は大きな反響をうみ、迫害は一時的に鎮静化したのである。

俺の仲間に手を出すな、とは確かにいい言葉だ。こういう言葉に出会うと人間も捨てたもので

はないと思えてくる。

某月某日。

コンサートツアーが始まった。今日は名古屋でコンサートを行った。久しぶりのライブだったので、心地よい緊張感があった。この街のアンコールは非常に粘っこい。なかなか客が帰らないのだ。いつまでも鳴りやまないアンコールを僕はメンバーたちと楽屋で聞いていた。この解放感が心地よいからこそ、作家の道へ進みながらも、歌を捨てきれないのだと思う。いつまでも、たとえ五十歳になっても、ライブだけは続けていたい。

某月某日。

快晴、暑かった。F Mの公開生ライブのために、大阪の万博記念公園へ行く。新大阪からメンバーとマネージャーを務める実弟とジャンボタクシーという便利な乗物に乗って、会場を目指した。ところが休日とぶつかったこともあり、道は非常に混んでいた。会場入りの時間が迫っているというのに、車は万博記念公園を目前に全く動かなくなってしまった。随分先の方に目印とも言える岡本太郎作の太陽の塔が見えているのにだ。

(懐かしい、まだあったんだ)

そうこうしているうちに、風に乗って爽やかなメロディが流れてきた。あの甘い歌声にはきき覚えがある。ビギンだ！ ということは後三十分で、僕たちの出番ではないか。生放送なので、遅刻は許されない。トミー（これが我が弟の名前なのだ）は運転手さんにくらいつき、魔法でもなんでもいいすからなんとかして下さいよ、と泣きそうな顔で懇願するのだが、運転手さんにそんな力があるわけがない。ずっこけていると、突然横からギターリストのホンチが、歩こうよ歩けばいいじゃんこれくらい、と言った。思いつかなかったことではないが、言葉にしたくはな

かった。大きな鞆とギターを抱えた僕たちには過酷な選択だった。それでも歩くしかないことは誰もが分かっていた。

近くに見えていた太陽の塔も、実際に歩いてみると、遠く聳^{そび}える摩天楼のようなもので中々近づかない。革ジャンを着ていた僕はすぐに汗だくになってしまった。渋滞する車の間をできるだけ何も考えずに歩いた。僕たちを見にきていたと思われるカップルたちが車の窓越しに、あっ、そっくりさんだ、と指をさした時には恥ずかしさで顔が真っ赤になってしまった。あれ、何してんのこんなところで、と呑気に質問してくるヤンキー風の若者もいた。僕はそれらの雑音に耳も傾けずひたすら歩き続けたのだった。

なんとか、十五分ほど歩いて万博記念公園のすぐ側までたどり着くことが出来たのだが、今度は入口が見当たらない。会場は周囲が土手に囲まれていて、しかもその先には高さ二メートルほどの高い柵がある。どこかに門のようなところがあるのだろうか、そんなものをさがしている暇もない。どうしよう、とトミーが呻き、正論しか言わないホンチが再び、乗り越えるんだよ決まってるじゃん、と言った。反論するものはいなかったが、柵を越えながら、越境者の気分を味わった。

結局、会場についたのはビギンが終わった直後で、一息つく間もなく、僕たちはすぐに演奏をはじめなければならなかった。演奏が盛り上がり上がらないわけがない。それはいいのだが、盛り上がりすぎて、生放送されている演奏はめっちゃくちゃであった。いろんなことがあるから人生は面白いのである。

某月某日。

雨。日比谷野外音楽堂でライブを行う。だいたい梅雨の時期に野音でコンサートなんか開かな

くても良さそうなもののに、当日までずっと晴れるものだとは僕は信じて疑わなかったのだ。しかし、当日は雨だった。そういえば何度か野音でコンサートをしているがいつも雨だった。すっかり自分のことを晴れ男だと思っていたし、実際不安がるスタッフには「大丈夫、僕は晴れ男だから」と言いつづけてきたのだが、よくよく考えてみると僕は雨男なのである。ああ、何という思い込み。お陰でどしゃぶりの野音となってしまった。

しかし、激しい雨に打たれながら演奏するロックには、裏も表もない真剣な精神が宿っていた。雨合羽を着てずぶ濡れになって声援を送ってくれたお客さんの顔は忘れられない。僕は後半、降臨状態になった。あのトランス感が欲しくて僕は三十四歳にもなってもまだ、ロックにこだわっているのかもしれない。

某月某日。

生まれてはじめて歌舞伎を観にいった。恥ずかしい話だが、それまで一度も観たことがなかった。なんとなく眠くなりそうなイメージがあった。

ところが、おもしろいから一緒に行きませんか、と友達の南果歩さんに連れられて観に行くと、それはそれは物凄いエンターテインメントなのであった。急に日本の文化が誇らしく思えてしまうほどに。

僕が観たのは、中村勘九郎が主演の『東海道四谷怪談』である。いわゆる「お岩さん」だ。日本に住んでいてお岩さんを知らない人はもぐりと言われるくらい誰でも知っている話である。

勘九郎の『東海道四谷怪談』は昔ながらの歌舞伎を多少現代風にアレンジしてあるようだが、その仕掛けや、見せ場の多さには驚かされた。提灯ちようちんがいきなり燃えだしてそこから幽霊役の役者が飛び出してくる「提灯抜け」といわれる見せ場や、仏壇の中から顔をだしたお岩に男の人が

襟首を纏まれ仏壇の裏側に引きずりこまれる「仏壇返し」など、どこを切り取っても飽きることなく堪能できた。圧巻だったのは、「本水」と呼ばれる文字通り本物の水をふんだんに使った場面であった。そのシーンに入る前に役者さんが舞台袖に出てきて、これから水しぶきが飛びますからビニール袋を配ります、と冗談を交えながら場を盛り上げる。舞台に巨大な池や川が現れ、次々にそこへ役者が飛び込んだり、そこから役者が飛び出してきたりと、もうそれはステイプン・スピルバーグ顔負けの大エンターテインメントなのである。三列目くらいまでの人がびしょ濡れになっていたが、客は本当にみんな楽しそうであった。

昔ニューヨークで観た『ロッキー・ホラー・ショー』なんかも、がんがん水しぶきが飛んでいた。お客さんも最初からそれを楽しみにしていて、傘を持参している人も多かった。歌舞伎の「本水」は昔からこれをやっていたわけで、江戸時代の人達の遊び心の広さとその斬新さには驚かされた。伝統も捨てたものじゃないな、とついつい感心してしまうほどに。

一方、歌舞伎の音楽にも僕の心は動いた。幽霊や人魂が登場してくる時に流れるヒュードロドロというあの音楽。あれがまたいいのだ。ヒューという笛の音と、ドロドロという太鼓の、なんとも不気味な掛け合いがたまらない。この音楽にもいろんな決まりがあるみたいで、ドロドロ一つとっても、静かなドロドロは、幽霊が恨み言を言ったりする場面に使われ、力強いドロドロは幽霊が人間を引っ張り廻すような場面で使われるのだそう。聞くだけで怖くなる不気味な迫力がある。あれを芝居のない時に稽古している人達がいるということ想像するのもおかしい。

『東海道四谷怪談』を書いたのは鶴屋南北である。江戸の時代に、ホラーが流行っていたというのも、何だか凄い話だ。しかしホラーの根底にあるのは人間関係の複雑なしがらみから派生した怨念や情念の世界である。それはつまり人々の愛と営みを見つめる温かい眼差し裏返しでもあ

る。

庶民の間で、このようなお話が受け継がれ、しかも成長し、さらに多くの共感を呼んで息づいているのだから、歌舞伎という文化の奥の深さと新しさには脱帽だ。

今度はもっと古典的な歌舞伎をぜひ観にいつてみたい。

某月某日。

函館文学館主催の文化講演会があり、函館まで出掛けた。函館は僕が多感な青春期の四年間を過ごした、ある意味で故郷のような街で、去年開館した文学館の一隅には、恥ずかしながら僕のコーナーまで常設してある。

「何でもいいから辻さんが普段小説を書くときに使っている品々を寄贈して頂きたい」

三年ほど前に函館市教育委員会の方がはるばる東京まで訪ねてこられた時のことを思い出した。ああいうところは既に亡くなられた文人を偲ぶところであるわけで、まだ生きている新米の僕の生原稿なんか飾られるのは実に不可解な話である。若い観光客を呼ぶための客寄せパンダみたいな役目なのだろう、とその時は多少訝った。

とりあえず、生原稿や使い古しの鉛筆や消しゴムなどを渡したのだが（やっぱりこれってへんだよね）、綺麗な展示ケースの中で昨日まで使っていた自分の丸っこい消しゴムや歯形がついている鉛筆が飾られているのを見ると、なんか故人になってしまったような感じで奇妙であった。

そういうばこんなことがあった。前に遊びに行った時に、一緒に行った集英社の片柳氏から、これはまずいんじゃないかな、と指摘されてしまった部分があった。みると『カイのおもちや箱』という小説の生原稿の一ページ目に赤字が書いてあり、漢字を間違えているのである。それを校正の方が赤ペンでまるで添削のようにぐりぐりと塗りつぶしているものだから余計に目立つ